



麗しの煎茶器（撮影は西牟田梢）

興  
趣奔  
走

## 自娯の悦楽

文人煎茶、そしてZOOM茶会

明尾圭造

## 自娯の感覚

あれは中学の頃だったか、「莊子」齊物論の故事に基づく「胡蝶の夢」を読んで、人生は東の間の夢の如しと思うようになった。

以来、いずれ儂い生涯ならばと、自らの心の赴くままに書を読み、様々な場所に身を置いてきた。幸い、多くの方々の教導によって学芸員の職を得、教員となつて今日の活計を得ている。

そんな私が近年こだわり続けているのが「自娯」の精神、乃至はその感覚である。読んで字のごとく、自ら娯しむ、自分のために娯しむということだが、余人に合わせることなく人間（じんかん）を往来し、自らの道をゆくのはそう容易いことではない。

これまた永年にわたつて調査を進めている大坂画壇のなかで、町人を中心に独自の展開を遂げた近世文人（画）のサロンこそ自らが理想とする「自娯」に最も近い感覚であると思うに至った。

— 金銭を介せず互いの友誼によつて娯しまれた大坂の文人世界で、彼らを代表する人物として木村兼葭堂（酒造業・本草学者・文

人画家―一七三六―一八〇二)と岡田米山人(米穀商・津藩士・文人画家―一七四四―一八二〇)を挙げることに大方の異論はないだろう。何れも生業を持ち、「自娛」の感覚で向かい合った共有空間(サロン)は時代を超越して、近代的な感覚に溢れている。

こうした数寄者のサロンが自然発生的に形成され、互いの「自娛」の感覚を共鳴させるために重要な役割を果たしたのが煎茶であった。

### 大坂における文人趣味と煎茶

日本で煎茶が流行するのは十七世紀から十八世紀にかけてと言われるが、その始原は遙か中国の宋・元の時代まで遡れるという。

こうした中で、寛文・元禄以降、北前船による物資の流通と中之島に林立した蔵屋敷によって、大坂は未曾有の経済的發展を遂げた。町人がその主役であったことは言うまでもないが、彼らの思想的基盤は長崎を通じて入ってきた中国的観念にあったこと、そのなかでも「自娛」の世界を体現するものとして中国の文人に憧れを持ったことが重要だ。

中国における文人は官僚による理想的な文化創造の極みだが、一方で官僚崩れにして書画に秀でたものも含め、広大な裾野を持っている。本来比べるべくもないが、圧倒的な経済力を有した江戸期の大坂において、気持ちの上だけでも文人趣味に傾倒する人々が出てきた。前述の木村兼葭堂や岡田米山人を中心とした面々で、個々の文房(書齋)において研鑽した成果を披瀝する場として漢詩結社や博物・書画の会が繰り広げられた。こうした集いにおいて、個々の「自娛」を損なわず、ある意味で触媒の役割を果たしたのが形式に囚われない煎茶であり、その創造空間として大坂特有のサロン文化が形成された

言えるだろう。

### 現代の文人煎茶 一茶庵の茶事

室町末期に連歌や立花を嗜んだ一心(享祿四年没)を祖とする他家。その後、様々な家業を経て、黄金期(江戸中期)の大坂町人に親しまれた文人煎茶を受け継ぐ佃一茶庵がある。現在、宗家佃一輝氏と嫡承粹央氏により大坂町人の「自娛」の精神が大切に守り伝えられている。

さて、一茶庵とは学生の頃、学芸員養成講座において、先代(一祐)にご指導いただいた縁がある。当時は、茶会自体が初めての経験でもあり、正座による足の痺れと抹茶の苦味しか記憶になかったが、年月を経て、大坂文人画の研究に目を向けた時、まさに必然とも言えるタイミングで宗家との出会いがあった。以来、公私に亘りご指導をいただいている。



宗家佃一輝氏

一茶庵は、大阪市中央区大手通一丁目という市中の一等地にある。開発が進んだ現在、同所はビルの間に挟まれ扉を開けなければ存在自体が分からないほどひっそりと佇んでいる。しかし、茶事が催され、控えめに開けられた門をくぐり、飛び石と竹林の垣根を進めば江戸以来の「自娛」の世界に誘われる。待ち受けるのは、文人煎茶のサロンにして宗家稽古場でもある九如卿堂と煎茶室土蔵である。

今では珍しくなった町家建築として九如卿堂と煎茶室土蔵は国の登録文化財(平成二六年十一月)指定を受けている。まさにこの場所で稽古が行われ、文人煎茶会が催されるのだ。

春及茶会、夏の玄談会、秋成茶会、祖堂先哲祭「事始めの玄談会」と四季に応じて茶会の末席に連なるお許しを頂いて久しいが、これほど心が解放され同好の士と心置きなく語らえる場(サロン)は未だかつて経験したことがない。

床の間に掛かる書画はミュージアムピースの中国書画を中心に、文房四宝とともに時代を経た茶器食器が惜しげも無く使われる。もちろん、宗家手すからの煎茶を頂きながら、山海の珍味に舌鼓を打ち、旨し酒を酌み交わす。こうして、知覚味覚を総動員して体感する茶会が娛しくないわけがない。

もとより、古書画や鑑賞陶器については、職業柄(学芸員)、展示作品として接してきた自負心がある。しかし、一茶庵では董其昌や文徵明の書が平然と床の間に掛けられ、近寄って見ることも可能だ。一方で、万暦赤絵の大皿で旬の魚を頂くこともある。文人煎茶の伝統たるや恐るべし。

かくも豪華なしつらいながら、茶会は終始にこやかに心地よい時間が流れていく。そこに、宗家の計り知れない懐の深さと変幻自在のご対応が感ぜられる。客への食事のタイミングや興味の在りどころ、そして物言わんとする口角辺の気配を察せられる絶妙の進行はまさしく文人茶会の名指揮者と言えよう。

### コロナ禍とZOOM茶会

さて、私も一人一本の掛幅を持ち寄る趣味の書画会(無花果巻軸)会を密かに催している。ある時、宗家が当会で吊るしていた「濁風」旗に興味を寄せられた。本来、売茶翁が野外で茶席を設けた際に、木の枝に掛けた「清風」なる茶旗を由緒とする。ちなみに、この旗は「清風・通仙亭(上下)」「負郭占楼地 緑林致茗筵」(右左と記されたもので、野外茶席の告知板を兼ねた風流なる一品である。



濁風旗

この「清風」という感覚に対して、虫損甚だしい書画を披露するのだから、「濁風・蟲郵亭」「珍品占楼地 為奇人設席」とするパロディー精神で自作したものだ。

折から、世界をコロナ禍が覆い尽くし、我が国でも今年四月七日に非常事態宣言が発出され五月二五日に解除宣言が出されるまで、まさしく全国民が未曾有の状況を経験したが、未だ収束の兆しは不透明なままだ。

その中であって閉ざされた「自娛」の世界を取り戻したいと宗家から連絡を受けた。いつか見た「濁風」旗を使い、清に対して濁、本流に対する亜流という観点から茶会を考えたらどうだろうとのご提案である。

世界が閉ざされ、個々の人々が気鬱な状態にある今こそ、文人茶会の「自娛」の感覚が重要だと気付かされた。

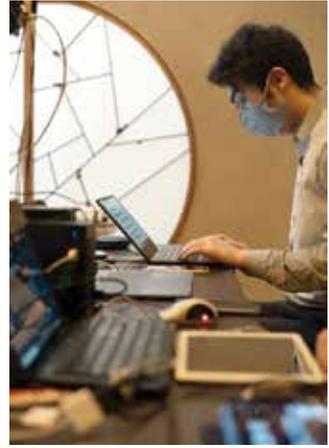
とは言え、茶会は、閉ざされた茶室で数寄者が肩寄せあつて掛幅や茶器を鑑賞し、饗応される料理を娛しむ一味同心の場である。非常事態宣言下、全ての営みが抑制され、密集を避け社会的な距離を保つことが求められるようになった今日、密の代表とも言える茶会をどう実践すれば良いか。

かくして、始まったのがZOOM茶会である。いわゆるオンライン煎茶会(事前の申込み制)だが、問題となったのは茶事に必須の煎茶とその手技を如何に配信するかということであった。手とり足とりという言葉があるように、師匠と弟子の間に濃密に繰り広げられる手技は文字や映像だけでは伝えきれぬ部分があるだろう。それこそが芸道における相伝の極意と言えるもので、今忌避される密閉、密集、密接の三密によってのみ成熟される世界だか

からこそ難しい。

手探りで始まったZOOM茶会は、出席者が然るべきコロナ対策を施しながら茶会を進行したのだが、時に映像が中断し、音が途絶えるなど予期せぬ事態の連続であった。限定的な状況のなか、若き宗家嫡承梓央氏の裏方に徹する努力によって、文人茶会は映像と音声を同時配信する前人未到の領域に入ったとも言えよう。

ここで五月に実施されたZOOM茶会での案内状をご覧いただこう。



オンライン対応中の嫡承梓央氏

「清風茶会」

—「蘭」を見る・鄭板橋と木村兼葭堂—

一茶庵九如艸堂にて、鄭板橋と木村兼葭堂の『蘭』を掛け、現代の浪華の文人達と文會を開いています

皆様に、そこにオンラインで加わっていただく形の茶会です。

参加の浪速の文人 中谷伸生(関西大学名誉教授)

橋爪節也(大阪大学教授)

明尾圭造(大阪商業大学准教授)

亭主 佃一輝 (一茶庵宗家)

「濁風茶会」

—大坂・大阪の今昔—

一茶庵九如艸堂にて、大坂・大阪に関わる名品珍品の数々を見ながら、現代の浪華の聞人たちと広きにわたって論じ

ています。

皆様に、そこにオンラインで加わっていただく形の茶会です。

参加の浪華の聞人 口八丁法蓮齋 先生

羽雀塗莊(攝津爺) 先生

蟲邨亭攝派 先生

亭主

景董山

「清風茶会&濁風茶会」は本来の一茶庵茶会参加者への発信のみならず、コロナ禍における未知の数寄者に向けての発信でもあった。

「清風茶会」においては本姓で、「濁風茶会」では衣装を着替えてつ雅号を名乗る演出の凝りようだ。

淹れられる茶は勿論のこと、掛幅も変えながら、二部構成で都合三時間に及ぶ茶会となった。

現代の文人・聞人とはおこがましい気もするが、江戸期に出版された人物誌(『浪花郷友録』)にも「文人」・「聞人」(名が聞こえた知識人)の項目が見て取れる。我々参加者が、果たしてその任を全うせるや否や。因みに私こと「蟲邨亭撰派(道人)」は虫損甚だしい書画を蒐集する撰津辺りに住まう道半ばの人を意味している。



清風茶会の愉快的な面々

## 「濁風茶会」について

さて、濁風旗を掲げる茶会も七月、九月と回を重ねて三回目となった。益々、清に対して濁の部分が強調されてきた感もあるが、宗家のリードによって清濁を貫く一本の道が見えてきたように思う。

初回は大阪に関する名品珍品ということだったが、第二回の清風茶会は「とりあえず船場派」と題し、大阪四条派を代表する西山芳園・完瑛親子の代表的な作品を取り上げた。

しかし、今まで違和感を抱きながら使っていた「大阪四条派」が気に入らぬ。いつまで経っても四条派(京都)の大阪支店の感、



十時梅崖「墨蘭図」(個人蔵)



西山完瑛「美人図」(個人蔵)

が拭えないからだ。芳園・完瑛を主とする主要な画家が船場周辺に住居することから「船場派」とすればどうだろうと盛り上がり、「とりあえず船場派」と名付けた次第である。

上品な作品が並んだ清風に対して、濁風における完瑛の怪しき振り返り美人が興味深かった。花街に関する風俗資料を交えつつ、同図の画賛に四苦八苦していたが、ズーム参加者から出典のご指摘を受けた。まさしくオンラインならではの臨場感を感じたものだ。

また、第三回の清風茶会は大坂における文人画の巨匠「十時梅厓」を取り上げた。伊勢長島藩の藩儒にして文人画家であり木村兼霞堂とも所縁の深い重要な人物である。大坂でも人気があり多くの作品が今日に伝わっているが、真贋定かならざるものが多い。

梅厓に詳しい羽雀塗莊こと橋爪節也氏によれば、長島藩致仕後は生活の為か、癸亥(享和三年)一八〇四)年記の作品が多く、まさしく「書画地獄」の状態であったという。

研究者の間では、「ダイナミックな作風こそ梅厓の真骨頂」とする意見と「いや緻密な作品こそ重要で、本来儒者である彼の画賛に注目すべき」とする意見もある。

何れ劣らぬ梅厓好きが集まった茶会で、互いが持ち寄った作品を褒めて貶して終始議論が尽きようはずもなく、宗家も含めた談論風発は、往時の文人茶会もかくやありなんと思われた。ただ、反省すべきはオンライン茶会であることを忘れるほど娯しみすぎ

たことで、この点、大いに反省すること然り。

何れにしても、こうした試みは新たな展開を促す契機となるだろう。一茶庵では、世上の動向を見ながら、清風・濁風茶会に限らず通常茶会も対面式とZOOM茶会を併用するハイブリット型の茶会を進められている。未だ治らぬコロナ禍の地平に対する宗家と嫡承の挑戦に微力ながら尽力したい。

とは言え、義務感に苛まれることなく、全ての事象を娯しむ感覚を持ち続けることが肝要であろう。こうした文人茶会を含め、大坂文人画の普及を「事後」(終わったもの)にすることなく、かといって中途半端に「自悟」(分かったような振り)に陥ることもなく、あくまでも「自娯」に徹して暮らして行きたいものだ。

(本学公共学部准教授)

研究経過

筆者は、本学着任前の20年間近く、東京都の中小企業研究・経営支援機関に勤務し、中小企業に関する研究とともに、中小企業診断士の資格をもっていたこともあって多くの企業の経営コンサルティングに携わってきた。

研究面では、美容容業からソフトウェア業に至る幅広い業種を包含する「サービス業」に関心があり、サービス業の業態分類、業態特性に応じたサービスマネジメントについて研究していた。

実務面では、中小商店やそれらが集積した商店街の経営に触れる機会に多く恵まれた。特に、1980年代は大型店出店紛争が激化した時期であり、筆者も大型店と差別化しうる中小商店の経営や商店街活動について、商店経営者や商店街のリーダーたちと膝を突き合わせて思案する日々であった。しかし、流通政策や小売業経営について本格的に研究することはなく、あくまでも実務家として経営の現場に没入しているに過ぎなかった。

本学着任後、じっくりと研究をすすめる機会を得たため、実務べったりの世界とは少し

距離を置くことを心掛け、中小小売店や商店街に大きな影響を与えてきた流通政策について、冷静な目で研究したいと考えるようになった。

わが国の流通政策は、大規模小売店舗法(天店法など)「大型店出店規制政策」と、商店街活動の支援など「地域商業振興政策」が車の

自著紹介

大阪商業大学比較地域研究所叢書第19巻

日本の小売業態構造研究

(御茶の水書房、二〇一九年二月)

南方建明

可能である。

その成果は、2003年および2013年に2冊の単著として出版し、それらをもとに「小売商業構造の変化過程における流通政策の役割に関する研究」をテーマとして、晩学ながら経済学の学位を取得することができた。

本書執筆の動機と本書の概要

現代のわが国の流通政策は、2000年に大店法が廃止され、大型店出店に対する経済的規制がなくなる一方で、地域商業の疲弊がすすみ、「地域商業振興政策」の効果を見出すことは、もはや難しくなりつつある。さらに「商業統計」も、2007年に実施された後は、調査対象のカバー率という点で少々問題が残る2014年調査を最後に、廃止されることになってしまった。

流通政策が小売業構造に与えた影響について統計的に分析することが難しくなったため、これまでの研究にひと区切りをつけ、小売業態間競争に着目した小売業態構造の変化に研究の焦点を移すこととした。その成果が、ここで紹介させていただく『日本の小売業態構造研究』である。

本書で明らかにしたことは、次のとおりで

ある。第一に、百貨店や総合スーパーなどの『総合店』、限定された分野では総合的な分野を扱うドラッグストアやホームセンターなどの『部分総合店』、限定された分野を扱う『専門店チェーン』の小売業態間競争について概観した。

第二に、食品に注目し、卸売業も含めた流通構造の変化、さらに外食・中食・内食に区分する形で食市場の構造変化について分析した。

第三に、『部分総合店』である「ドラッグストア」「ホームセンター」「コンビニエンスストア」「均一価格店」の成長過程について小売業態間競争に着目して明らかにした。

第四に、「専門店チェーン」の成長過程に基づいて、業種の類型化を試みた。

第五に、小規模小売店の売場効率と労働生産性からみた存立可能性について業種別に分析するとともに、中小小売店が集積している「商店街」の存続可能性について考察した。

第六に、統計からみた消費者の購買行動の変化について分析した。

本書の執筆にあたっては、政府統計はもちろんのこと、信頼しうる民間統計や調査を含むできるだけ多くの資料を収集し、かつ可能な限り過去にまでさかのぼって分析

している。

#### 今後の課題

2020年春からのコロナ禍により、インバウンドが皆無となり、百貨店を始めとした店舗小売業に大きな影響が及ぶ一方で、電子



商取引が増加するなど、小売業を取り巻く環境変化は激しくなっている。その中には、一時的な現象もあれば、今後の小売業態構造に大きな影響を及ぼすと予測される現象もある。これらの分析は別稿に譲るとして、本書では小売業態構造の変化について、大きな不連続要因のない2018年までのデータを用いて書き留めることができたと自負している(できれば、コロナ禍前の2019年までのデー

タを用いて分析できればベストだったのかもしれないが……)。

他方で、流通研究の世界では、なぜ新しい小売業態が生まれるのか、小売業態の盛衰をいかに説明するかについて、様々な「小売業態仮説」が提案されてきた。「小売の輪仮説」「真空地帯仮説」「アコーディオン仮説」などである。しかし、そのどれもが小売業態の成長過程や盛衰を十分に説明できるまでには到達していないといえる。

ひとりの流通研究者として、たとえば国に限定したとしても、小売業態構造の変化を説明しうる「小売業態仮説」を構築したいところであったが、浅学な筆者の力の及ぶところではなかった。

本書は、わが国の小売業態の発展過程やその盛衰についての記述にとどまり、今後の小売業態構造研究のためのささやかな資料を提供しているにすぎない。「小売業態仮説」の構築は、筆者の今後の研究課題であるとともに、本書に刺激を得た若い研究者が、わが国小売業態構造の変化を説明しうる理論仮説の構築にチャレンジしていただくことがあれば、望外の喜びである。

(本学総合経営学部教授)

◆日本学術振興会「人文・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」継続助成

2018年度に日本学術振興会より得た、「人文・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」拠点機関におけるデータ共有基盤の構築・強化委託業務」の助成は、今年度も継続して採択された。

本業務では、JGSSのこれまでの実績を活かし、広く人文・社会科学系研究者の研究基盤となり得るデータインフラストラクチャーの構築の重要な拠点として、①データアーカイブ機能の強化、②海外発信・連携機能の強化、③データ間の時系列等接続関係の整備に取り組む。

◆文部科学省・機能強化支援と科学研究費基盤Aの採択

JGSS研究センターは、2016年度から2018年度にかけて文部科学省より「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業（機能強化支援）」の助成を得た。2019年度に再申請して、2020年4月に採択された。今年度採択された4拠点のうち、人文・社会学系の共同研究拠点は、JGSS研究センターのみである。

さらに、科学研究費基盤A（東アジアにおける健康と社会の持続可能性に関する総合的研究・代表岩井紀子）が採択され、A票とB票の2種類の調査

票を用いるJGSS・2021の実施が決まった。

◆JGSS・2021の実施

2020年4月には、EASS (European Social Survey) モジュールと新型コロナウイルスに係る研究課題を公募した。12件の応募のうち8件を採択した。これらの設問を組み込んで全国20～89歳の日本人男女6600人（440地点）を対象に、2021年1月に留置調査法で調査を実施する予定である。A票にはEASSのモジュールを組み込み、ヨーロッパ諸国と日本における新型コロナウイルスが人々の生活と意識に与えている影響を把握し、各国の政策やその効果などについての比較研究を行う。B票には韓国・中国・台湾チームと共同で実施しているEASS (East Asian Social Survey) の健康モジュールを組み込み、日韓中台の人々の健康状態・行動および健康に係る社会環境の十年の変化をとらえ、EASS 2010のデータを基に展開された議論を深化させる。

◆JGSS最新報告書

『日本版総合的社会調査 基礎集計表・コードブック JGSS・2018』

『日本版総合的社会調査 基礎集計表・コードブック JGSS・2018G』

◆新JGSS研究員の紹介



孔 栄鍾（こん よんじゅん）

プロフィール：韓国ソウル出身。佛教大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。2020年4月よりPD研究員として勤務。専門は障害者福祉政策、障害者貧困問題。JGSS研究センターでは、データの作成・クリーニング・公開準備などを担当している。



郭 凱鴻（かく がいこう）

プロフィール：中国北京市出身。立命館大学文学研究科博士課程後期課程修了。2020年4月よりPD研究員として勤務。専門はGISと都市空間研究。JGSS研究センターでは、データ作成とダウンロードシステムの確認を担当している。趣味はフィールドワークや撮影、料理。



潘 建秀（はん けんしゅう）

プロフィール：中国大連市出身。広島大学教育学研究科博士後期課程修了。2020年4月よりPD研究員として勤務。専門は比較国際教育学。JGSS研究センターでは、データの作成とクリーニングを担当し、地域国際化の阻害要因を研究している。趣味は旅行と芸術鑑賞。